



生活発表会について

今年の生活発表会は、感染状況の高止まりが続く中での開催となります。それぞれのご家庭でも、感染予防を徹底され、万全の体調で参加できるようご協力をお願い致します。



年少児 12月20日(火) 集合時間 10:00~10:20

開演 10:50 歌・器楽合奏・劇を発表します。

年中児 12月21日(水) 集合時間 9:00~9:20

開演 9:50 歌・器楽合奏・劇を発表します。

年長児 12月22日(木) 集合時間 9:00~9:10

(*ゆり・もも)

9:30~9:40

(*きく)

開演 9:50 劇を発表します。



生活発表会プログラムと詳細につきましては後日配布致します。必ずお読み頂き、確認をお願い致します。学年とクラスで集合時間が異なります。お間違いないようにご注意下さい。

当日の会場となる札幌市教育文化会館の駐車場は利用できません。公共交通手段を利用してご来場下さい。また、お車で来場される方は、近隣の有料駐車場を利用して下さい。幼稚園での駐車場の確保はありません。ご了承下さい。



(心の育ちシリーズ) 生きること、愛することの意味

伊波さんは1943年沖縄に生まれた。14歳のとき、ハンセン病を発症。当時ハンセン病にかかると「らい予防法(96年廃止)」という法律により、社会から隔離され、一生施設内で生きて行く運命になる。ハンセン病と診断された日、14歳の伊波少年は、家族と最後の食事をし、涙の別れをする。

翌年のことだった。伊波少年の書いた作文がコンクールに入賞し、内地に送られた。それが、文豪・川端康成の目に留まった。沖縄を訪問する機会があった川端は、伊波少年を訪ねた。川端は、伊波少年の手を取り、目に涙を浮かべて言った。「たくさん書きなさい。自分の中に蓄えなさい。」別れ際に「何か欲しい物は?」、川端は聞いた。すかさず伊波少年は「本です。」

ある日、伊波少年は、岡山県にハンセン病患者のための公立高校があることを知り、脱走も決意した。父親に協力してもらって実行した。脱走はまるで映画のようだった。とりあえず、鹿児島施設の中学生として岡山の高校を受験。その高校で一人の外科医と運命的な出会いをした。その医者の治療を受け、ハンセン病を克服した。社会復帰した伊波さんは、診療所の看護師だった女性と結婚し、二児の父になった。しかし、元ハンセン病患者に対する偏見と差別は容赦なく、伊波さん家族を引き裂いた。離婚だ。

家を出ていく日、8歳の長男と口論になった。「僕はお父さんについて行く。」「ダメだ!」「どうして?小さいから?」「じゃあ、いつならいいの?」「10年後だ!」と答えた。啞嗟だった。

10年が過ぎた。一人暮らしの伊波さんのアパートに18歳になった息子から電話があった。「約束の10年が経ったので行ってもいいですか?」と…伊波さんは驚いた。「あいつ、覚えていたのか!?!」

数日後、息子は東京都の地図を片手に伊波さんのアパートを訪れた。「多摩地区」のページだけがボロボロになっていた。10年間、ずっと父親の住む多摩地区のページを眺めていたのだと言う。

らい病法には、政府の誤りがあった。ハンセン病に対する差別と偏見は、筆舌に尽くしがたく、それでも人間にはその運命を越える力がある。

生きること、人を愛することの意味を今の14歳に伝えたい。

みやざき中央新聞より